

可決(改正会則は後日全会員に報告)。続いて役員改選に移り投票の結果会長平井春樹(留任)、副会長梅原旭瀧(新任)、幹事四人(庶務)馬場晴水、木下皇水、(会計)揚嶽水、(監査)牧南水、顧問植村實水(新任)の各氏決定。次ぎに毎年恒例の筍鑑賞会を梅原女史の好意により四月二十五日(日)午後同女史宅で催すことに話がまとまり夕食を共にして七時半散会した。

京都石清水八幡宮祭典に諸芸奉納

四月四日(日)満開の桜花のもと多数の参拝者を前に時代風俗行列が境内四百米の石畳上を練り歩き午後同宮特設舞台上で諸芸奉納会、琵琶部は中島旭徳女史が「舞扇鶴ヶ鷲」を立方二人付きで献奏、好評を博した。

京都八坂神社で琵琶献奏

四月四日(日)午後三時から日本伝統芸能団の協賛で各種芸能が奉納され、琵琶部は中島旭徳が担当して伽羅の兜、福西旭紅、石田三成、柳田旭波、大楠公一、会長中島旭徳の三曲を献奏、盛況を呈した。

筑前琵琶演奏会

四月十八日(日)午前十一時大阪北区曾根崎一丁目本むさし会館五階、主催筑前琵琶関西連合会(事務所田中旭昇方、司会大阪地区、世話人柳本旭風、高千穂旭楓)、創立第二回演奏会で大坂、東大阪、浪速、姫路、岡山、備後、相生、大阪中央、神戸、桜井の各協会参加。賛助出演(扇舞)早瀬鯉昇外四人、(日本舞踊)花柳芳磨外二人、藤間扇伯外一人(尺八)藤原鴨堂、(琴)小川貴子、(胡弓)鈴木章夫の華々しい催しで盛況を極めた。天の羽衣、青柳旭子、別所旭美、鈴木旭鈴。

前田秋声氏

三月十九日午後八時五十八分東京幸仁病院にて胃がんのため逝去、享年八十二。故永田錦心師の直門で堅水と号して錦心流を着実に伝承しその演奏振りは上品且つ美事な捌捌きで定評があり名古屋時代を経て秋声会本部長となり東京、名古屋その他に教授所を開いて多く惜しい人を亡くした。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

(予告)

○大阪平野大念仏寺法要に琵琶献奏会 五月五日(日)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。
○京都琵琶協会五月例会 五月九日(日)午後

二時、本部平井会長宅。
○第三回青年琵琶演奏会 五月十六日(日)正午東京港区赤坂公会堂、主催尾崎三郎氏。
○各流派琵琶演奏会 五月二十三日(日)正午、京都東山仁王門バス停前本妙寺本堂、主催京都琵琶協会。
○各流派琵琶名流演奏会 六月五日(日)午前十時大阪東区本町四丁目北御堂津村別院ホール、主催日本琵琶協会関西支部(有料)。
○故辻靖剛先生追悼演奏会 六月十三日(日)昼東京証券会館ホール、主催日本琵琶協会。

あ

馥郁たる梅花の香に酔ったのも束の間。花の命は短かくて。春宵一刻を楽しんでいる内に爛漫の桜も散り果て今年も早や1/3が過ぎ去って五月の好季節を迎えるが、歳月に関守なしとは蓋し金言で、今更ながら月日の経つのが早いのに驚く。関西地方は三月末から四月上旬が桜満開であったが東北、北海道方面では四月下旬に桜花が訪げられるそうである。地方愛読者の皆様をしらべて一筆したためた。春の夜は桜に明けてしまひけり(芭蕉)。
●爽春から初夏にかけて立派な演奏会が各地で開催されつつあるが筆者は家庭の都合でどこへも拝聴に伺えず、また予定していた自分の出演も総て見送らざるを得ないこととなり主催の方々に相済まぬと思っている。どうか御寛容願ひ上げる。

昭和五十七年五月一日発行(非売品)
編集者 植村 真 水
発行所 吹田市山田東二丁目三番B六四番
電話 〇六(八七五) 〇三二六番

琵琶

京

結

第三三五号 京 絃 社

平家の栄華と都落(四)



三浦の人々は既に出発したものの、まだ到着していない。頼朝の軍勢がまだ十分に集まらぬうちに早くも石橋山を襲撃したのは、大場景親を始めとする平家方三千余騎の精兵で、戦は二十三日の夜、雨の中で行われたが、何ぶん十分の一小勢、源氏遂に敗れて頼朝は山中に逃れた。平家の追撃は急であったが、梶原景時が頼朝の隠れ場所を知りながら、巧みに景親を外へ誘導したので、頼朝はようやく一命が助かった。梶原はこの時平家方であったが、後源氏に附いて重く用いられるに至ったのは此の因縁によるものである。

八月二十八日、頼朝は小舟で土肥の真鶴崎から海を渡り安房に上陸した。それから使者を立て、関東の豪族達に、早く来て力を合わせるように命じた。使者を迎えた千葉常胤は感泣し、一門を率いて頼朝を迎える。石橋山の敗戦で、身を以て脱出した頼朝は千葉介を迎えられ、従兵三百騎に及んだ。

そこへ現れたのが上総介広常、二万の大軍を率いて来たが、来るのが遅いと云って許さない。広常は驚いた、今日の情勢は平家全盛で、頼朝は云わば流人である。それが拳兵して全盛の清盛と対決するといふのだから、抜群の器量、古今無双の英雄でない限り成功の見込みはない。そこで先ず頼朝の人物を試し、つまらぬ人間であったならば、直ぐに討ち取って平家に味方しようと思っていたのが、二万の大軍を喜びもせずに来るのが遅いと叱られたので、これは偉い武将だと広常は心服し、頼朝に味方するに至った。

それから頼朝は、豊島清光、葛西清重、足立遠元らの出迎えにより武蔵入りをする。平家方として活躍していた畠山重忠、河越重頼、江戶重長らも頼朝の麾下に入る。頼朝は畠山を先陣として相模の国鎌倉に至り本陣を構えたが、平家の武将であった是等の人々は、頼朝の先祖頼義・義家父子に仕え、その武略と

人柄を慕って家来になっていたからで、千葉常胤などは頼朝からの使者を迎えて感激し涙を流したという。
頼朝が鎌倉を本拠としたのも頼義・義家以来の由緒深い土地で、父義朝もここに館を構えていた。頼義は石清水八幡宮を迎えて鎌倉の由比に神宮を建て、義家も神社を修復したが、頼朝は八幡宮を小高い山上に遷して厳肅にお祭りをした。これが即ち鶴岡八幡宮だ。

十月十六日、頼朝は鶴岡八幡宮に祈りを捧げて、即日進発駿河に向った。それは平家の大軍が平維盛の引率で東海道を攻め下ったとの情報に接したからで、薩摩守忠度、三河守知盛が維盛を補佐し、五千余騎の大軍を以て九月二十一日福原(神戸)出発、十月十八日富士川到着という手ぬるい行軍で極めて緩慢である。若し石橋山合戦の勝利に乗じて機を逸しなかったらば、関東の豪族たちも平家に味方していただろうに、二ヶ月余りのうちに源氏の勢力は決定的に強くなってしまった。兵は迅速を尊ぶというが、維盛の平家軍は余りにも緩慢過ぎたと云わねばならぬ。
源平両軍は富士川を挟んで対陣。平家の侍大将上総守忠清は斥候兵を出して源氏勢の模様を尋ねると、
「凡そ七日八日が間は、はたと統いて野も山も海も河も皆武者にて候、昨日黄瀬川にて人の申し候ひつるは、源氏の御勢二十万騎とこそ申し候ひつれ。」
忠清はこれ聞いて、

「あな心憂や、大將軍の御心の延びさせ給ひたる程、口惜しかりけることは無し。今日も前に討手を下させ給ひたれば、大庭兄弟、皇山が一族などが参らせ候ふべき。是等だに参り候はば、伊豆駿河の勢は皆徒ひ附くべかりつるものを。」(平家物語)。



五絃閑話

水藤 五朗

変革の時

今日は変革の時代である。あらゆる分野で価値感がゆれ動いている。この事は、芸の世界でも同じである。今日迄、当然であると思われていた事が、異った立場の人から、別の価値感で見られるようになって、改善を要求されるようになったり、逆に、好ましくない事が良い伝統側面だと云われたりして、いろいろな変化が生まれている実状がある。

勿論、こう云う状況があつてこそ、また、この変革の波を乗り切つて受け継がれていってこそ、始めて、伝統として評価を得るのであり、文化として、伝統としての、真の価値は、本来、そうして生まれるものと云える。琵琶の伝統に於いても、そのことは同様である。琵琶芸術自身、今後、我が国の文化の一隅に存在し得るか、否かについては、変革

時代に適応する態勢を、琵琶界に生きる人々が、その自らの手で作り上げることが出来るかどうかで決定するのだ、と私は思う。

琵琶界の中で、ごく当然と思われて続けられてきた事柄、いわゆるそれが伝統であるのなら、その伝統の再考を、真剣になさなければならぬのである。

演奏会についても、その運営方法から、舞台装置に至る迄の、ありとあらゆる点について再考され、工夫されたものにならなければ、やはり変革の時代にはついてゆけないことになる。

だが、最も根本的な点についての改革がなされなければ、結局は、徒勞に終つてしまうことになるかも知れない。

その根本的な事とは、琵琶人自身の芸に対する姿勢である、私はくり返して述べた。プロとアマと云う、どの社会でも問題になる事柄が、琵琶界では、タブーな事として、又、縁遠い問題として、論議されることのないまま、できてきているのである。

昨秋、亡くなった辻靖剛翁は、昭和三十五年、琵琶人の多くを糾合して日本琵琶楽協会を設立した。その設立の趣旨は、他ならぬ琵琶専門家擁護の為であった。以来、二十余年の歳月が流れ、辻靖剛翁を含めて、当時の設立委員として名を列ねた主だった琵琶人は、この世を共に去ってしまった。そして、結局設立の趣旨であつた琵琶専門家擁護の難問は、その実現はもとより、その思索活動や討

論なども、ほとんどなされることなく、現在に至つてしまった、と云うのが実状である。

当初、事ある毎に、専門家を擁護々と演説した辻翁ではあつたが、その決まり文句のような、或る意味では夢のような空文が(少なくとも、演説を聞き乍ら私などは思つていた)この数年、全く影をひそめてしまったのを、果して何人の琵琶人が話題にしたであつたらうか。考え方によつては、辻翁自身その決まり文句の実現化の難かしさにウンザリなされてきたのかもしれない、と想う。

一昨年「専門家評議会を開催する故、専門家である貴方は、準備金として三万円納入されたし」との回状が配布された。日本琵琶楽協会の封筒で、振替用紙と、パンフレットが送附されてきたのであつた。この事は、当然琵琶楽協会の総会で質疑応答があつたのだが、その時に、ほとんどの出席者が、「琵琶の専門家、云々ゆるプロの琵琶人などは存在しないし、自分達もそうではない」あくまでもアマチュアとしての立場で」と主張した。その討論結果もそういう方向で決定されたのだが、私にとつては印象深いものであり、大いに考えさせられた討論であつた。

結果としては専門家の集まりは出来ないままで終つたのだが、この事自体について見れば、残念な結論であつたと云えよう。私自身は、その質疑応答の中で、この様な一方的な形での一つまり三万円を支払うようにと振替用紙まで送ってくる「専門家」の集まりの都合

設置には、断固として反対であり、賛成し得ないことを述べた。が、しかし、専門家の集まりが出来て、その人々による演奏会等が行なわれてゆく、と云う運営そのものについては、何等の異議もなく、むしろ大賛成でさえあつた。即ち、趣意には賛同であり、方法には反対であつた。若し、この様な点だけから反対されているならば、この問題もさしたることはないのだが、多くの出席者が、「我々はプロではなく、アマチュアなのだ」と主張したから、問題が論議の対象外になつてしまつた。

出席者が云うところの「専門家の琵琶人については全く考慮の外であつて、アマチュアの立場が現実的である」とする説はそれなりの意味があると思う。たゞ残念なことは、出席者のかなりの人々が、実際、琵琶界の頁を飾つてきた琵琶人であり、その人々は正しく琵琶の専門家であると、社会から思われている事を自覚していながら、その場で「私はプロだ」と主張できない、認めあえない状況があることである。それは正しく、琵琶界に於いて専門家とは、素人とは何なのか、と云う討論研究が日常なされていなければならぬ。先ずは、こゝからが第一歩と云えよう。



おんなの都(九)

落合一誠



戦国の世は男の時代、力が総てに優先する。女性は何の発言力もなく、ただ男性の都合のよいように動かされる生きた人形にはかなならなかつたのである。

小谷の城主浅井長政が織田信長に反旗をひるがえした時、その妻お市は何の相談も受けて居らず、従つて、まさか兄信長の手によつて小谷の城が攻められようなどとは夢にも思つていなかった。ところが良人と兄との間に合戦が起こつてしまつたので、どちらが勝つても負けても彼女は不幸になるばかりである。いふやうに良人の板ばさみとなつてしまつた。お市の方は悲しみに打ちひしがれてそう念じている。すると浅井の家臣中には、お市が長政を裏切つて、信長に情報を送つているのではないかと疑う者も現われて、お市はいよいよ兄と良人の板ばさみとなつてしまつた。

ところが、戦さには天才といわれる信長は、忽ち小谷城を落城寸前に追い込んでしまつた。この時、長政二十九歳、お市二十七歳、どちらも飽きも飽かれもせぬ仲の良い夫婦であつた。信長は、妹婿長政に対して度々使者を送

り降伏せよ、然らば大和一國を与えようというのである。

然し、長政にも男の意地がある。それに信長は自己中心で我儘な男であるから、いつ気が變つて自分を斬らないとも限らない。そうなる、彼は敵の軍門に降つて首を斬られたと、末代まで汚名を残すことになる。為めに長政は信長の提言に応じなかつた。しかしお市の方は道連れにするのは可愛想なので、城を出て信長のもとへ帰るよう勧めたが、お市は、長政の妻ともあろう者がそんな卑怯な真似は出来ぬという。長政は重ねて「幼ない娘連三人のために生き長らえて浅井家の菩提を弔うて呉れ、最後の頼みだ。」

子供のためと云われると、そこは母親のこゝとゆえ、お市も次第に心を動かされた。だが、女兒は許しても男児は許すまいと、長政は嫡男万福丸を越前へ、当歳の次男を近江の福田寺へと、ひそかに落ちのびさせた。

こうして、お市の方は、おちゃやをはじめ三人の姫達をつれて、小谷城をあとにした。久方ぶりに妹お市と幼い姫達を迎えた信長は大層喜んだ。そして遂に八月二十八日、小谷城は猛煙に包まれて落城、長政父子の首は京へ送つて市中引廻しの上獄門に、長政の母小野殿は捕えられて、両手の指を毎日二、三本ずつ斬つて苦しめた上、また城から逃げのびた万福丸も捕えられ、美濃関ヶ原で磔(はりつけ)の刑に処した。これを知つたお市の方は余りの惨酷さに声をのんだ。そして、

これを行つた秀吉を深く恨んだが、その命令は実の兄信長から出ていたのである。

そのためお市の方は、後に柴田勝家と豊臣秀吉がお市を望んで争つた時、ためらいなく勝家を選んだのであるが、そのため後日越前北の庄の城に於いて、遂に自害せねばならなくなつた。それは天正十年(一五八三)六月二日、信長が本能寺で自刃した後のことで、信長弑逆の明智光秀を亡ぼした秀吉は勢いに乗じて天下を望み、その行く手に立つ柴田勝家と一戦を交しえる羽目となつた。

時に勝家六十一歳、朝倉に替つて越前北の庄に城を構える勝家の許へ輿入れしたお市の方は、ちやちやを始め三人の娘を伴つていた。従つて勝家は娘達の義父となつた。

やがておちやちやは十五歳。そして越前北の庄は秀吉に攻められて、あえなく落城した。



霊峰壺坂寺

辻 旭城

筑前琵琶宗家橋旭翁先生、作家網谷一才先生合作の「壺坂寺」によると、「たとえその身は斃るとも、つくす誠心妻の道、壺坂寺に願をかけ、嶮しき山路にただ一人、はだし詣りの三年越し、それとも知らぬ沢市の、あらぬ疑い今晴れて、今宵お山へ二人連れ、杖に

すがらせ登りゆく、貞女の姿ぞ健気なる、盲

驅投谷欲亡身、畢竟在除妻苦辛、何捨観音慈愛救、勿癒眼疾両眸新、あゝ眼があいた眼があいた、観音様のご利益と、沢市お里抱き合

い泣いて喜ぶいじらしさ……。

真青な空に鯉のぼりが気持ちよさそうに泳いでいる。初夏を思わせるような汗が出る日だ。絃友石橋旭翁君と近鉄阿倍野駅から吉野線に乗車した。三連休の初日で急行電車は満員である。壺坂の駅前は今しがた下車した参詣者で大賑わい。土産物屋や食堂から、しきりに客を引いていた。

一時間一回しか出ないという節約的な奈良交通のバスが迂りこんで来た。「壺坂寺前行」と方向板に書かれてある。参詣者は先陣争いに夢中だ、車内の喧騒も治まると、バスは動き出した。

約二十分、高取町の東南およそ四キロの山中にある壺坂寺前に着く。入口に仁王門があり、その手前を左へ入つて、社会福祉法人聚徳会慈母園の事務長前田高氏を訪ねた。

養護老人ホームは六十歳以上の男女百名で、市区町村福祉事務所長から委託を受けて、特別の支障がない限り入園可能のことだった。壺坂寺は、養老年間法興寺の弁基上人の創建と伝えられ、元正天皇の勅願所となつた有名な寺院で、観音信仰が広まつた一つに「壺坂霊現記」がある。

浄瑠璃、浪曲などに脚色されたこの作品は、現在では通用しないかも知れないが、「夫婦

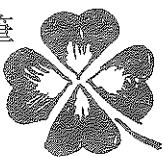
愛」が美事に描かれている。西国三十三番札所の内、第六番の大和壺坂寺観世音にまつわる霊験記で、浄瑠璃の作詞は二世豊沢団平の妻千賀、作曲は主人団平となつてゐる。その内容は、草深い霊山の麓に沢市という座頭が廃家に住んでいた。三年にわたり雨の日も風の夜も、美女の妻お里が夜更けて抜け出すのを、沢市は盲目のひがみから外に男が出来て

いるものと思ひ込み、或る夜ひそかにあとをつけたところ、夫の眼を治そうと、この観音に祈願をこめて通つてゐることがわかり、申

訳ないと寺の裏の谷に身を投げた。それを知つたお里もそのあとを追つて谷に飛びおりた。すると不思議にも観音の霊験によつて二人とも命が助かつたのみならず、沢市の盲目が治つたという。それが四方に伝わつて、益々観音信仰が広まつたのである。

壺坂の月に杖ひく夫婦かな。浄瑠璃の「三つちがいの兄さんと」というサワリは一躍有名となり、速くアメリカ、ヨーロッパでも、この「夫婦純愛」の物語を聞いたり知つたりすることが婦人の誇りとしてゐるといふ。山路いとわず女の身で、はだし詣りの三年越し……とある。お里が通つた嶮しい山道も、近代文化の波に乗つて現在では、奈良交通を始め全国各地からの観光バスが途絶えることなく、参詣者を運んでゐる。

この山深い霊山に立つて暮れゆく空を見上げながら、遠い昔の夫婦愛の心の誠が、しみじみと感ぜられた。



四絃漫筆

島津天嶺

(九) 琵琶振興の論その後

本誌に琵琶振興の論を投じてから、私のこの趣旨をお会いする琵琶人といつても私の場合は薩摩正派の方ばかりであるが、私に話し申しあげているが、ある長老の方がおっしゃるには「琵琶の歌謡曲化ですわ」と。全く御指摘の通り、しかし琵琶がこれからの若い人にも愛せられるためには琵琶の歌謡曲化もやむを得ないと思つてゐる。

御承知のように西郷南洲翁の終えんを歌う琵琶歌で最もポピュラーのものは勝海舟作の「城山」であるが、他にも土屋大夢作の「岩崎谷」、「城山くづれ」があり、鹿児島ではよく歌われている。又筑前系には萬生桂兩作の「西郷隆盛」、三世旭翁作の「秋風故郷山」がある。この中「西郷隆盛」の曲は演奏会の席で聴いただけでその歌詞を持ち合せないので、これを除く四曲を比較して見ると、最も詳細にとりより最も写實的に書かれてゐるのが「城山くづれ」で、隆盛が別府晋助の介錯で死んだあとの桐野利秋等の奮戦の様相まで描写されている。「岩崎谷」はこれとほぼ

同じ内容であるが、歌は大分短かくなつてゐる。「城山」は御承知の通り、この歌になる

と戦場の写実性はずつと落ちてくる、そして「秋風故郷山」は二五〇字位。余談になるがこれが漢詩となると「孤軍奮闘」とわずか二十八字で表現されてしまふ。

このように同じ史実を取り扱った歌でもその写実の精練によつて当然のことながら歌の長さは非常に変わってくるが、現代の歌謡曲や民謡しか知らない若い人達や又年輩の人でも琵琶に興味のない人には「城山」の十五分の演奏にもついてゆけないのではなからうか。

勿論演奏者の芸能力の大きさにより聴衆の傾倒度は大いに左右されるが、大きな芸能力を持った人が短時間演奏する方が聴衆に与える感動が大きいから対象が大衆の場合は短曲を選ぶ方がよいように思ふ。

次ぎにある先輩の方は「短くてよい歌を誰か作つてくれないかなあ」と嘆ぜられたが、これはもつとものことである。本誌二月号の「好きな曲目あれこれ」で上位にある歌は、数多くつくられた琵琶歌の中で多年の間生き抜いて来た秀歌ばかりである。琵琶の歌も先づ作られねばならぬ、そしてその中で演奏者が好んで歌い聴衆も喜ぶ歌が生き残つてゆく。

こんな自然淘汰的な方法で琵琶の秀歌集ができることを望んでやまない。本誌上に琵琶曲が掲載されることはこの意味で非常によいことと思つてゐる。

話はすっかり変わるが、この二月十五日にNHK・FMで吉田旭幸師(絃は中村旭園師他)の「山吹の夢」という放送があつたが、これは立派な琵琶曲、そのうちこの歌詞を頂いて私も勉強したいと思つてゐる。

最後に私は「秋風故郷山」を私風に作譜して歌つてゐる。今様のところを吟替りにしたのが「ミン」であるが、結構正派の歌としてそのまま通りようである。御参考に供しておきます。

秋風故郷山

(謡い出し) 明治十年の如月や 薫る梅花と純情を (切り) 競う数千の若殿原 (大千) 恩師と仰ぐ西郷が 征韓論に破れたる (崩れ) 無念を汲みて隆盛を 擁してあぐる関の声 (崩れ) 先づ熊本を一もみと 青春の意気天をつき 鹿児島島打つて出でけるが (中干) あわれ戦運つたな (落ち) 苦戦重ぬる数ヶ月 (吟替り) いつしか秋の訪れて (干) 友は散りゆく木葉坂 田原坂にぞ水雨降る (吟替り) 雨は降る降る人馬は濡るる (干) 越すに越されぬ田原坂 山に屍、川に血流る肥薩の天地秋淋し 追われ、故郷の (切り) 山辺の露と消えてゆく あゝ城

山の夕あらし 老いたる松の蕭々と 人の運命の果敢なきを 語るが如く泣く如く (止め) 語るが如く泣く如く。

(各流派の琵琶人さま、ご自由に作曲、演奏して下さい。)

新曲 蜘蛛の糸

平井春嶺作詞・作曲



わが身のみ 良かれと願うその人は 遂にはその身を滅ぼさん。紫雲たなびく極楽の池の蓮は白き花 朝の光りに輝きぬ。釈迦は池の辺にたたずみて 水を透して遙かなる下の様子を見給えば 血の池地獄に蠢めける亡者の群れのその中に 健陀多の居るを見給いぬ。この健陀多は世に在りし時 あらゆる悪業せしもの ある日林の中程にて 小さな蜘蛛を見付けし時 踏み殺さんといたせしが 小さな小さき虫けらにも 生きる命のあるならんと 蜘蛛を助けしことありき。釈迦はそのこと思ひ出し この健陀多を地獄より助け出さんと思いつき 蓮に張りし蜘蛛の糸をおん手にとりて一筋を 池を通して血の池に苦しむ彼の目の前に しずかに糸をば降されぬ。健陀多はこれを見て 思わず手を拍ち喜

こびぬ。この糸を傳い昇りなば 地獄を脱げんのみならず 極楽浄土へ行くことも 容易すきことと思いつき エッサエッサとよじ昇る しばし昇りて行く程に 少し疲れて一休み 遙かの下を見降るせば キラキラ光る針の山 メラメラ燃ゆる火の地獄 かすかになれば喜こびて フト真下なる血の池を 眺めてアツト驚きぬ こそは如何にわが後に何百人の亡者共 蜘蛛の糸をば昇り来る。こんなに細き蜘蛛の糸 この大勢にて昇りなば切れてしまふは必常なり されば我が身も共に 元の地獄に落ちぬべし。健陀多大声張り上げて この蜘蛛の糸はわがものぞ 誰れの許しで昇りしか とく下りろ 逸く下りろと喚きける。その時糸は健陀多の いるところより断れければ 独楽の如くに廻りつゝ まつ逆さまに落ち行きぬ。後には蜘蛛の糸キラキラと 細く光りて垂れ下る。釈迦は極楽の蓮池の ふちよりこれを眺めつゝ 健陀多が血の池に落ち行けば いと悲しき風情にて やがてそこをば離れ行く。我が身のみ地獄より 抜け出さんとする無慈悲さを 釈迦は浅間敷く思われぬ。池の蓮はゆらゆらと 夢を動かし金色の 蕊より溢るゝ得も云えぬ香りは辺にたゞよいて 極楽は午に近づきぬ 極楽は午に近づきぬ

(わが殺せし蜘蛛の霊を慰むるため) 芥川竜之介作「蜘蛛の糸」より。

白井河原や 天王山の合戦

福田 良夫

秋、もの思いにふけりながら、何気なく「荒城の月」など口ずさんでいました。名曲との関連から、ふと大阪三島の「古戦場」に思いが飛びました。矢も楯もたまらず、とうほどではありませんが、散策した次第です。古戦場といえは、時は矢張り、信長の時代にもどります。川中島、桶狭間、天王山、関ヶ原、有名な地名、そして地形が、次々と頭に浮かびます。

中川頼兵衛清秀が、土地の土豪から、戦国武将への交通切符を手に入れた「白井河原の合戦」の跡です。大阪茨木市を流れる茨木川と、勝尾寺川が合流して、西国街道と交わるあたり一帯で、昔はここを「白井河原」と呼びならされてきました。

陰徳太平記によりますと、中川清秀は織田信長に服属した池田の領主。池田正勝に従う二十一人衆の一人でしたが、のち、同僚の荒木村重らと共に、主君を追い出した茨木生まれの土豪です。当時は下克上の時代で、別に珍しいことではありません。白井河原では、元龜二年(一五七一)八月、

村重と組み二千五百騎で、將軍足利義昭に属する和田惟政の茨木・高槻勢五百騎と激突しこれを打破りました。和田方は、白井河原のすぐ東に位置する糠塚(ぬかつか)に陣取り、中川方は川をはさんで五百米ほどの西の馬場に陣を敷きました。今、戦い跡の合流点に立ち当時を回想しますと、ワァーッという合戦の雄叫び、土煙りを巻き上げる人馬の群れ、甲冑や刀がふれ合い、打ち合う音が目に浮かび、耳に聞こえてきそうです。

勝ち戦のあと、中川清秀は和田惟政を打ち取った武勲で茨木城主となり、四万四百石の戦国大名となりました。その後も清秀は、織田信長に従い、播州三木城攻めなどに加わり手柄をたてて勢力をたくわえていきます。信長の死後は秀吉に従いました。なかなか良い政治をしたようでありませぬ。

名曲「荒城の月」からの、白井河原の合戦の回想には、わけがあります。清秀はその後、賤ヶ岳の合戦で討ち死にし、遺子の秀政が茨木城主となりますが、天正十三年(一五八五)三木城へ、更に九年後には九州岡城七万石の大名になりました。荒城の月を作曲した滝廉太郎は、この中川藩出身です。

天王山も、まあ地元のようなもの、島本町から京都府境の大山崎町の古戦場が有名すぎるので、一般には白井河原はあまり知られないのかも知れません。天王山の戦いにも中川清秀は手柄をたて

ました。本能寺の変のあと、秀吉は毛利と和睦して引返して来ますが、清秀は密命を受け逸早く出撃、二千五百騎を率いて、ひそかに標高二百米のこの山に陣を敷いていました。天王山を制していたことが勝敗の分かれ目となつたといわれます。(五六・一一・三)

前田秋声先生逝く

阿部 秋子



桜の便りも聞かれるこのごろ、先生は春を待つたず幽明境を異にし、永久の黄泉路へ旅立たれました。

思えば大正のころ、流祖永田錦心先生を中京名古屋へお招きして、演奏会を何回となく開催され、錦心流の発展に大いに活躍されたと聞いて居ります。昔を御存じの方は御承知かと思いますが、前田堅水として多くの子弟を育成され、当時の愛弟子、故神村師水氏は私の恩師で、神村先生亡きあと親身になって、何くれとなく御力添え下さり、ささやかな私演奏会を催すことになったのも、前田先生の大きな後ろ立てがあつたればこそと、今更ながらかえり見るのです。

春になれば快くなる、きっと快くなると信じた私共会員も奇跡を願ひ、ペットで演奏会

日本琵琶悠絃会三月例会

三月二十八日(日)屋敷東京中野区大和町地域センター。門琵琶合奏一山崎錦幽、八束一峰、追悼詩大村鼓城師を悼む一錦幽、良寛詩境一木村香吟、桜狩一金尾秀水、漢詩二題一天羽岳水、感有一壬生千重、異国の丘一青木早水、御夢の跡一富士岳鮮、彰義隊一清水源城、西郷隆盛一長谷川錦水、白虎隊一中村洲心、滝口入道一田戸桜丸、小松の操(三)一鈴木鶴颯、五時二十分散会。(来賓)橋本草水、坂入晴峰、軽部岳瑞三氏。

京都琵琶協会三月例会

三月四日(日)屋敷本部平井会長宅。平井春嶺、水内煖水、岸本港水、木下皇水、桜井旭富、荒木旭媛、牧南水、山岡旭清、矢吹旭美津、梅原旭濤、楊嶽水、林旭朋、馬場鴨水の外賛、助会員高橋正雄、福島弥生両氏列席。まず五月二十三日の演奏会出演順抽籤を行い、続いて三月例会で宿題となつた会則一部改正案につき各人忌憚のない意見を披瀝して全会一致